

秋田藩家老小場宣忠関係文書について

金子 拓

はじめに

先般筆者および川亘・加藤昌宏両氏の共編にて、『佐竹義宣書状集―梅津憲忠宛』（東京大学史料編纂所研究成果報告二〇一三―三、二〇一三年九月）を刊行した。¹⁾

ここには、秋田藩主佐竹義宣が元和元年（慶長二十年＝一六一五）から寛永六年（一六二九）のあいだに家老梅津憲忠に宛てて出した書状二百七十二通を収めた。これらを翻刻するため義宣・憲忠の関係文書を検討した過程で、近世初期の秋田藩藩政、および藩主義宣の動向を考えるためには、当然のことながら憲忠宛書状を検討するだけでは不十分であり、その他関連史料の収集・検討も課題となることをあらためて認識した。

その課題のひとつが、寛永年間前半頃憲忠と並んで家老職にあった小場宣忠に關係する文書の検討である。

小場家は佐竹家十二代義宣（近世秋田藩初代藩主とは別人）の庶兄義躬を祖とし、常陸北部を本拠（現茨城県常陸大宮市）とした佐竹家の有力一族である。²⁾ 宣忠は家老として義宣に仕えた渋江政光（慶長十九年の大坂冬の陣において討死）の実弟にあたり、小場義宗の娘を娶って小場を名乗った。³⁾ 寛永元年（元和十）春より家老に任ぜられたという。最初小伝次を名乗り、のち源左衛門と改めた。後述する宣忠宛文書を見ると、元和九年まで小伝次であり、寛永二年より源左衛門となっていることが確認される。家老になると同時に名乗りも源左衛門と改めたと推測される。寛永九年二月二十六日江戸にて没した。⁴⁾ 家は養嗣子（政光三男）宣利が嗣いだ。

元禄・宝永年間における秋田藩の修史事業において小場源左衛門家からも文書が提出され、これらは「秋田藩家蔵文書」(以下「家蔵」と略す)第十九冊に「小場源左衛門処房家蔵文書」としてまとめられている。ここには二十五通の文書が収められている。うち二通が宣忠宛の義宣書状、十七通が宣忠宛の憲忠書状である。

これらは定期的に「佐竹義宣書状集—梅津憲忠宛」に収めた憲忠宛義宣書状と重なる。このため小場宣忠宛の書状もまた、藩主義宣と家老との情報のやりとりを考えるうえで重要な素材となる。むしろそれだけにとどまらない。憲忠・宣忠の家老間におけるやりとりをうかがうことにより、二人の家老の役割分担のあり方や、憲忠宛書状だけではわからなかった義宣の動向を補完することも可能となるだろう。

そこで以下本稿では小場宣忠宛の佐竹義宣書状・梅津憲忠書状を中心に翻刻紹介したい。紹介するにあたり、これら文書群が藩の修史事業のなかでいかに取り扱われてきたのか、またその後どのような伝来を経て現在に至るのかといった点について整理して述べておきたい。

一 小場家文書の概要と伝来

元禄・宝永の修史事業のおり、小場源左衛門家より藩の御文書所に提出された文書は三十通あった。修史事業が一段落

した宝永六年(一七〇九)段階において御文書所に保管されていた史料の目録『御文書并御書物目録』(秋田県公文書館所蔵、整理番号ASO二九一、以下宝永目録と呼ぶ)には、「一、古書三十通一袋小場源左衛門所蔵
内二注文アリ／御用相済返シ附ラルヘシ」とある。この項目のある括りには「追テ吟味ノ上本書ノ分返シ附ラルヘシ」と記されており、宝永六年段階で一袋に一括して保管され、いまだ吟味が終わっていない状態であったことがわかる。梅津家の文書と異なり、宝永六年段階には原型が成立していたという『義宣家譜』に利用されていないのは、このような事情からだろう。

文書提出時に添えられた目録は秋田県公文書館(以下公文書館と略す)佐竹文庫に「小場源左衛門届書」の史料名にて伝存し、提出内容が明らかとなる(整理番号ASO二九一—〇)。右の宝永目録の割書にある「注文」がこれだろう。日付は八月二十六日とあるだけで年記は不明だが、元禄・宝永年間ではあるだろう。「小場源左衛門届書」(以下端裏押紙により「古書目録」と呼ぶ)全文を以下に掲げる(丸数字は以下の記述の便宜のため筆者が付した)。

(包紙上書)「上」(宋書以下「内閣」)「七ノ義」 小場源左衛門

(端裏押紙)「小場源左衛門指出ス古書目録」 「七ノ義」

覚

①、從 義宣公御直書式通

②、從 鑑照院様梅津半右衛門被下候御書卷通

③、梅津半右衛門憲忠所^{〔上付〕}遺候書狀拾七通 「内卷通紛失、寛政三年亥八月調」

④、梅津長三郎所^{〔上付〕}遺候書狀卷通

⑤、梅津主馬所^{〔上付〕}遺候書狀卷通

⑥、信太兵部少所^{〔上付〕}遺候書狀三通

⑦、梅津半右衛門所江岡三郎兵衛・菅谷隼人両人名所二而遺候書狀卷通

⑧、神尾内記殿^{〔上付〕}信太兵部少所へ被遺候御狀式通

⑨、土井大炊殿御家頼大野伊兵衛所^{〔上付〕}遺候書狀卷通

⑩、元和九年 御上洛之時分御渡被成候御掟書一通

惣數合三拾通

八月廿六日

小場源左衛門

前述のように、ここで提出されたうちの二十五通(①③④⑤⑥⑩)は『家蔵』に収められており、しかもそれらの原本の多くは現在公文書館佐竹文庫に収蔵されている。古書目録の情報を基礎に、原本情報その他を表としてまとめた。

この小場家の文書群について気づいたことを以下述べる。

第一点、提出文書のうち五通が『家蔵』未採録だが(②⑦⑧⑨)、こちらは『家蔵』と別に編纂成立した同類の古文書集

『御文書』(現在千秋文庫所蔵)のほうに収められていること。第二点、提出された宣忠宛憲忠書狀十七通のうち、十五通の原文書が公文書館に伝存すること。また十七通のうち一通は寛政三年(一七九一)の時点で所在がわからなくなっていたこと。第三点、提出文書中、憲忠書狀以外のものについても四通の原文書伝存が確認されること。第四点、伝存する原文書には朱筆で「七ノ義」「義」「仁」と記入されており、古書目録にも同様に「七ノ義」の朱筆書き入れがあること。第五点、目録中に記載のない宣忠宛義宣書狀の写二通・宣忠宛義隆書狀二通の計四通が佐竹文庫に伝存していること。第一点について、三十通の文書はいかなる判断で『御文書』と『家蔵』に分けて写し収められたのだろうか。

『御文書』に収められた五通を見ると、これらはすべて小場宣忠以外の人物に宛てられた文書である。五通ともとは小場勘解由所蔵とあり、『御文書』巻頭にある文書目録の該当箇所に付箋が貼付されている。

たとえば②にある付箋には、朱筆にて「宝永八年御青印扣ニ梅津半右衛門ニ被返下トアリ、梅津文書ニハナシ」と記されている。つまりこの文書は、藩の修史事業の過程で御文書所によりもと小場家に伝来する由緒がないと判断されたため、吟味後宛所である梅津憲忠の末裔に返却される予定であったことになる。残る四通もおなじような事情が付箋に朱

書されている。

ところが②の付箋に「梅津文書ニハナシ」とあるように、付箋作成時点で返却予定先には文書が確認できなかったようである。他の四通もやはり同様である。これら五通は返却されずにそのまま御文書所に留めおかれていたとおぼしい。事情はまたあとで触れる。

以上、『御文書』の五通は、もともと元禄・宝永年間まで小場家に伝来していたものの、修史事業の過程において小場家から切り離され、名宛人の末裔に戻されることになり、『家藏』の「小場源左衛門処房家藏文書」にも収められなかったものである、と考えられる。

秋田藩の修史事業においては、御文書所に提出された家藏文書を吟味し、その家に伝来する正当性がないとみなされた文書は、本来伝来すべき（と御文書所が判断した）家に移されることがおこなわれた。以前筆者が検討した岩屋家文書などがその典型的な例であり、小場家の文書も同様の処置をこうむった。

伝来の正当性の有無についての判断基準は多様であろうが、文書の伝来論の見地から言えば、宣忠宛ではない文書が小場家に伝来するばあいも十分想定できる。一例として、（寛永六年カ）六月二十四日付大野仁兵衛書状（二九号）がある。

大野は幕府老中土井利勝の家臣であり、宛所の信田（信太）

兵部少輔は秋田藩の江戸留守居であった。このなかで大野は、江戸の神田土橋修築にあたり、わざわざ秋田より人足を呼び寄せるほどでなく、江戸にて日雇い人足を集めればすむこと、直接会って話すべきだが咳気のため書状を出したことを述べている。

この書状と深く関係すると思われるのが、七月七日付信太兵部少輔書状（二三号、梅津政景・小場宣忠宛）である。このなかで信太は、利勝から「御国の人足奉行よび申事無用ニ申、爰元日用人足を以仕候へ」と言われたこと、さらに利勝の意見をうかがおうとしたところ、「仁兵衛」が病により熱海へ湯治に出かけて不在のため別人を通して利勝に申し入れたことなどを述べている。日付のうえでも、この七月七日付書状は六月二十四日付書状を受けたものであり、七月七日付書状に登場する「仁兵衛」は六月二十四日書状の差出者大野仁兵衛本人であると見て間違いあるまい。

つまり、七月七日付の書状が信太から政景・宣忠に出されたとき、六月二十四日付大野仁兵衛書状と一緒に添えられ、その結果小場家に信太宛の書状が伝わったかもしれないのである。

いまひとつの例は、寛永八年に推定される二月十七日付神尾元勝書状（二七号）である。元勝は幕府御使番であり、このとき信太兵部少輔に対し、家光が川越で発病したことに対

する諸大名の見舞は不要である旨を伝えている。このことが秋田に報じられたのは三月八日であった。『梅津政景日記』同日条によると、三月二日付で江戸の佐竹義隆から家光病氣を知らせる書状が出されており、このときこれを取り次いだのが、秋田にあった宣忠であった。義隆の書状に信太宛の元勝書状も添えられて秋田へ到来し、そのまま宣忠の手もとに留められたと推測してもおかしくはない。

宣忠以外の人物に宛てられているため小場家から切り離されようとしていた書状がほかに三通あった。これらは右の二例ように提出された小場家の文書と深い関係があることがわかる痕跡はなかったものの、同様の事情で宣忠のもとに送られた可能性は高いと言えよう。

秋田藩の修史事業における「名宛人主義」とも言うべき文書帰属の判断は、現在の史料学の進展により理解が深まった文書伝来の考え方に時として混乱を生じさせるもので注意が必要だが、小場家の文書群のばあい、たまたま提出時の目録（古書目録）と原本がそのまま返されずに藩に留められたため、以上のような事情がわかった興味深い事例である。

さて、小場家から切り離されようとしていた文書は、『家蔵』には収められなかったけれども、『御文書』のなかには写された。こうした小場家伝来文書のあつかわれ方は、右に述べたように秋田藩の修史事業を考えるうえでの重要な材料

であるとともに、『家蔵』と『御文書』の史料性格や成立について考えるための好材料ともなりうるだろう。この点については、当面鈴木満氏の研究を参照されたい。⁸⁾

第二点・第三点について、目録提出時に原本が添えられ、そのまま返却されずに藩に留めおかれていたのだろうか、あるいは文書はいったん小場家に返却され、その後何らかの過程でふたたび藩（もしくは秋田県）に入ったのだろうか。

宝永目録では吟味後「本書」（原本のこと）は返却が予定されており、また前述のように小場宣忠宛以外の文書は他家へ移される予定であった。しかしながら寛政三年時点で点数の点検がなされていること（ただし一通所在不明）、後述する天保年間の蔵書目録作成時点で朱筆が加えられていることから、小場家分・他家分いずれもが返却されずそのまま藩に留められていた可能性が高い。

これら小場家の文書原本が含まれている公文書館佐竹文庫は佐竹宗家の伝来史料である。一九五一年（昭和二十六）に秋田市内の佐竹家別邸に保管されていた史料が秋田県立秋田図書館に譲渡され、現在に至っている。¹⁰⁾ このことも右の推測を裏づける。

いま述べたことと関係するが、第四点にて触れた「七ノ義」「義」「仁」といった朱筆は、天保三年（一八三二）に藩の記録（御文書）方において編まれた蔵書目録『御蔵書目録』

乾・坤二冊（公文書館所蔵、整理番号A〇〇二九―一―）の分類に対応すると考えられる。対応する『御蔵書目録』乾の「七之内 義部」には、「一、古書二十九通一袋、外二目録一通小場源左衛門所蔵」とあり、このとき確認された文書・古書目録に「七ノ義」もしくは「義」と朱書が加えられたことがわかる。

この天保三年時点で二十九通と一通落ちていた。脱落した一通は、唯一「仁」と朱書のある二月二十九日付憲忠書状（家蔵文書十九―四号）にあたるのだろうか。おなじく『御蔵書目録』乾の「七之内 仁部」に「梅津半右衛門より小場源左衛門江遺書一通」とあるものに該当すると思われる。寛政三年段階で紛失とある一通もおなじ文書だろうか。仮にそうだとすれば、小場家提出文書・目録は宝永以来一袋にまとめられていたものの、何かのきっかけで一通だけ袋から脱落し、寛政三年の点検では紛失したと認識されていたと考えられよう。

古書目録に記載がある三十通のうち現在原本が確認できないものは十一通ある。うち三通は一九三三年（昭和八）に原本から影写され、史料編纂所影写本『佐竹文書』十に収められているので、その時点では佐竹家に伝来していたことがわかる。しかしその後秋田図書館に譲渡される一九五一年までに散逸した。またその他八通については影写もなされておら

ず、一九三三年段階ですでに散逸してしまっていたらしい。

第五点について、公文書館佐竹文庫には、いずれも寛永三年と推定される七月二十三日付・十一月二十日付の宣忠宛義宣書状写、正月二十二日付・三月二十九日付の宣忠宛義隆書状写が伝わっている。四通とも原本に忠実に筆写作成されたものである。これらは目録に記載がなく、当然『家蔵』などにも未収録である。宝永目録に「外二写四通、注文ニナシ」とあるものに該当するのだろうか。目録に記載されたのは正文のみであり、そのほか写し四通も添えられて提出されたが、『家蔵』には採録されず、文書自体も正文が入れられた袋に一緒にされず、そのため由来がわからなくなってしまっていた。

なお、史料編纂所影写本『奈良文書』（秋田県南秋田郡金足村奈良茂氏所蔵、一八九九年影写）中にも、宣忠宛義宣書状三通が収められている（六月二十九日付・九月十七日付・霜月十七日付、いずれも小場源左衛門宛の折紙）。影写のものととなった文書が原本なのか写しなのか、影写本だけでは判断しきれないが、これらもまた古書目録には収められていない小場家旧蔵文書である。

原 本	影写本	朱書	形態
	佐竹文書		
AS312-1-8	佐竹文書(原)	仁	継紙
AS312-1-5		義	継紙
			継紙
AS312-1-3		義	継紙
AS312-1-4		義	継紙
AS312-1-6		義	継紙
AS312-1-9		義	継紙
AS312-1-10		義	継紙
AS312-1-2		義	継紙
AS312-1-7		義	継紙
AS312-1-1		義	継紙
AS312-1-14		義	継紙
AS312-1-12		義	折紙
AS312-1-13		義	折紙
AS312-1-11		義	折紙
AS312-1-15		義	折紙
	佐竹文書(原)		継紙
	佐竹文書(原)		継紙
AS312-36	佐竹文書	七ノ義	継紙
AS312-37-1	佐竹文書	七ノ義	縦紙
AS312-37-2	佐竹文書	七ノ義	縦紙
AS312-142	佐竹文書	義	縦紙
AS310-176			横帳
AS310-177-1			折紙
AS310-177-2			折紙
AS310-177-3			折紙

付表 小場源左衛門提出文書

	目	文 書 名	宛 名	日 付	家蔵
1	①	佐竹義宣書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永3カ)8月12日	19-1
2		佐竹義宣書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永3)6月23日	19-2
3	②	佐竹義隆書状	梅津半右衛門(憲忠)	(寛永4カ)2月20日	御三
4	③	梅津憲忠書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永6)2月29日	19-4
5		梅津憲忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和9)7月7日	19-5
6		梅津憲忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和9)5月3日	19-6
7		梅津憲忠書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永4)極月15日	19-7
8		梅津憲忠書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永2)6月8日	19-8
9		梅津憲忠書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永2)6月27日	19-9
10		梅津憲忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和9)卯月15日	19-10
11		梅津憲忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和9)卯月28日	19-11
12		梅津憲忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和9)5月7日	19-12
13		梅津憲忠書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永2)5月15日	19-13
14		梅津憲忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和9)卯月19日	19-14
15		梅津憲忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和9)8月13日	19-15
16		梅津憲忠書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永4)極月9日	19-16
17		梅津憲忠書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永6カ)霜月28日	19-17
18		梅津憲忠書状	小源左(小場宣忠)	(寛永3)10月9日	19-18
19		梅津憲忠書状	小源左(小場宣忠)	(寛永3)5月19日	19-19
20		梅津憲忠書状	小源左(小場宣忠)	(寛永3)9月12日	19-20
21	④	梅津廉忠書状	小場小伝次(宣忠)	(元和8)9月12日	19-24
22	⑤	梅津政景書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永8)8月14日	19-25
23	⑥	信太兵部少輔書状	小場源左衛門・梅津主馬	(寛永6カ)7月7日	19-21
24		信太兵部少輔書状	小場源左衛門・梅津主馬	(寛永8年)8月3日	19-22
25		信太兵部少輔書状	小場源左衛門(宣忠)	(寛永8年)10月5日	19-23
26	⑦	岡忠政・菅谷元成連署書状	梅津半右衛門(憲忠)	(寛永6)1月4日	御三
27	⑧	神尾元勝書状	信太兵部少	(寛永8)2月17日	御二
28		神尾元勝書状	信太兵部少	(寛永8)8月5日	御二
29	⑨	大野仁兵衛書状	信太兵部	(寛永6カ)6月24日	御三
30	⑩	佐竹義宣掟書		元和9年5月15日	19-3
31	目録外	佐竹義宣書状写	小場源左衛門(宣忠)	(寛永3)7月23日	
32		佐竹義宣書状写	小場源左衛門(宣忠)	(寛永3カ)11月20日	
33		佐竹義隆書状写	小場源左衛門(宣忠)	(寛永8)1月22日	
34		佐竹義隆書状写	小場源左衛門(宣忠)	(寛永8カ)3月29日	

※「目」の丸数字は、「小場源左衛門届書」(本文翻刻)と対応する。

※「家蔵」は『秋田藩家蔵文書』の場合卅次-番号(秋田県公文書館編『秋田藩家蔵文書目録』)、その他は御文書とその巻次。

※「原本」は秋田県公文書館の整理番号。

※「影写本」は東京大学史料編纂所架蔵影写本の所在。

二 小場家文書の紹介

以下ここで紹介するのは、元禄・宝永の修史事業のおり小場家から提出されたと先に推測した三十四通の文書である。

右に考察したとおり、古書目録に記載のある原本三十通、および一緒に提出されたとみられる写し四通である。原本（もしくはその影写本）があるものはそれに拠り、そのほかは『家蔵』に拠った。番号は、ひとつのまとまりに複数通あるばあいは『家蔵』もしくは公文書館の整理番号にしたがつて配列し、全体を「小場〇」のように通し番号を付した。また翻刻にあたっては、樋口九三氏謄写にかかる『秋田藩家蔵文書』（公文書館所蔵AS二八〇—二—一—四〇）も参照した。年次・人名などの注記については（ ）内に記した。文書末に※印を付して補注とした。また『佐竹義宣書状集』収録文書について触れるときは、同書の文書番号のみを示した。

小場一 佐竹義宣書状（『家蔵』二）

金銀為登候者、無異儀参着候、荷共遣候間、一所二可指置候、鉄砲共則兵具奉行之者二相渡、箱方取出、台をはなし、すの内へもねちの内へもとりめくほとあふらをさ、せ可申候、惣別其元二指置候鉄砲共、台と鉄砲之あわせめさびる物二候間、鉄砲のあたり候所へハ、台木へよくあぶらをぬり候様二、

兵具奉行之者二可申付候、從江戸之御鷹師衆下、上下候時、於秋田中鉄砲うたれ候事可有之候、人を相付遣候て、うたれ候ハ、申分候てうたせ申間敷候、松前方のほられ候時ハ、しれましく候間、かねて野城・比内へ申付、さし置、兩人計人を付、窪田迄付候而参候様ニ申付、可指置候、うし嶋の中嶋二太野之方方ありき候みち、水もかけ候て、ほそく候間、急度申付、つかせ可申候、あとくのミちハ、ほそく候間、ひろげさせ可申候、就中橋の弓手・めてなとをひろげさせ可申候、両二よししか小しばにてなミよけを可致候、それも水のふかき所二計可致候、中嶋へつき候てハ、ミちのひろさも今の分がよく候間、少そこねめ計直し可申候、窪田通町之橋かけなをさせ可申候、はねばしニかけさせ可申候、下の橋のこくとく二可仕候、余不入所へいつも手間を入、上ぶ過候間、手かるく、手間の不入様二可申付候、就中手きハなとハ不入事二而候、江戸之御鷹師登之時、何も何れもせうをくれられ候、当年もくれられ候ハ、請取候様二桐沢^{（宣）}二可申付候、いつものことく銀を十枚宛返礼二可遣候、併あわひのわろき鷹ならは、請取ましく候、謹言、

八月十二日（寛永三年カ）

義宣（花押影）

小場源左衛門殿

小場二 佐竹義宣書状 (「家蔵」二)

尚々、野城へ申付候而、はゞのひろさ六尺五寸ある板を、
あつさ三寸二成共、四寸二成とも、とらせ候て、可差置
候、夏山二取候様ニ可申付候、長サハ七尺、数ハ百枚可
申付候、ひわれさる様ニいたし、さし置候様ニ可申付候、
又よくひ候様ニおかせへく候、土などニ付候て置候へ
ハ、なま板ニなり候間、板ハよくひ候て、われさる様ニ
可仕候、以上、

歩走ニ上候者不入候間、返し候、大御所様去廿日ニ御京着
被成候、手前二者十九日ニ御先へ京着候、爰元相替事無之候、

行幸可被成置御用意迄にて候、鶴賀舟ニて茶つほ下り候
ハ、三がいの北ノ座敷ニ真中ニ可指置候、又茶小道具共遣
候も、三かいの二かいニ上候て、中ニ可指置候、た、ミのお
もてハ何方ニ成共、もりのかゝらさる所ニ、念を入指置可申
候、た、ミの下さしを式百帖為致候て、可指置候、不断居候
座敷のた、ミなどゝハ念を入、猶能致候様ニ可申付候、霜月
前ニ出来候様ニ可申付候、松前へ之鷹師江戸之御鷹師衆下之
時分指添候而、可遣候、松前より来候鷹をハ、壹つも当年者江
戸へ為登ましく候間、念を入其元ニ指置候様に、桐沢ニ可申
付候、また当年ハ節が越候て、鷹もはやく可遣候間、秋田仙
北ニ而まち候鷹まち共ニ申付、当年ハ毎年とはやく鷹を稼候
様ニ可申付候、はい鷹などハ尚はやく可遣候間、油断致間敷

由可申付候、ひがんの前より可為稼候、謹言、

六月廿三日 (寛永三年)

同前

小場源左衛門殿

小場三 佐竹義隆書状 (「御文書」卷三)

尚々、酒井雅楽殿御老母遠行、兵部可申上候、以上、

此中其辺御左右其聞え無之候、重而雪も消、御機嫌能毎日御
鷹野令推量候、御次之時分可然様可申上候、芳寿院様一段
御達者御座被成候、将又相馬長門殿諸大夫被仰付候、殊外満
足被成候、先立便之御失念候て不申上候、能様相心得尤候、
恐々謹言、

二月廿日 (寛永四年力)

義隆 (花押影)

梅津半右衛門殿

※相馬義胤の従五位下長門守補任は寛永三年十月三日 (寛政
譜)。

小場四 梅津憲忠書状 (AS312-1-8 / 「家蔵」四)

(端裏朱書) [一]

返々、石御渡候衆へ之御状、早々被遣之様ニ可被仰上候、
石之わたり申さぬさきに仕度候間、此飛脚ハ草臥、をそ
く可有御座候条、其元より御飛脚ニ早々可被下候、
一、大炊殿・信濃殿御請取候西丸ノ小口、ますかたなどハ

出来申候由申候へとも、其外ハ今少出来不申候由申候、雅樂殿などハ只今石をよせされ候由申候、

一、大炊殿 將軍様方あふらかたつきと申候を御拝領之由、青山善右衛門申候、就其四月中ニ御成を被成度とて、只今御成書院被仰付候由申候、此かたつきハ福嶋大夫殿方あかり申たる御茶入之由候、以上、

昨廿八日晚、森川金右衛門殿へ參候へハ、内々被為仰聞候分者、今度石御渡し被成候御奉行被仰付候、然者年来被懸御目候儀候間、少も無御如在旨被仰候、就其御同役之衆数多御座候、先達而久永源兵衛殿・森川金右衛門殿之儀者、兵部少・隼人・三郎兵衛承届、申上候、其外駒井次郎左衛門殿・池田図書殿・天野麦右衛門殿・石野六左衛門殿・小又吉左衛門殿、此衆御同前二候、左候へハ、

駿河大納言様を始申、いづれ方之御状・御音信物共御座候間、秋田方も被遣候て、可然候由被仰候、金右衛門殿も御同役二候間、被仰にくき事にて候へ共、金右衛門殿者数年被懸御目候間、内々為御心得如此候、

尤尾州・紀州阿大納言様、駿河様など方被下候物ハ、返進仕候事不罷成候条、致拝領、其外方被下候をハ、無殘返進被成候、弥下奉行衆方ハ肴にても御請取候ハす候間、被懸御目候とても、義宣様方被下候物も罷請候儀にて無之候、御同役二ハ候へ共、其外之御身上不屑之御方ハ、うけさせ

られ候と見え候間、御小袖を被遣候而能候はんや、数之儀をも被仰候条、別番二書付仕候、可被入御披見候、秋田へ申遣候てハ遅々可申候間、御状無之候共、御小袖用意仕、持參可申候哉と尋申候へハ、それハ 三大納言様など方もいづれへも御状被差添候条、御状を不被遣候ハ、何とか候はんや、ちとをそく候ても不苦候間、御状被遣候様ニ申上候へ、其間之儀者、石御渡し候ハ、金右衛門殿・源兵衛殿兩人計、義宣様ニハ御存知にて、其外之衆御同前之儀者無御存知候間、書状にても不參候と、私にも申候へ、金右衛門殿もさやう二可被仰候由、御内談にて候、此内兼而御存知之衆御座候哉、無御存知候共、其御文言にて被遣候様ニ可被仰上候、尚又御身上承届、それくにした、め可申候間、御判帛計も可被遣候、

一、加々爪民部殿御普請二付、御よこめの由、先達きかせられ候て、私罷上ニ、綿五十把可被遣と 御意二而、御判帛持參申候、左様二候へ共、爰元にて能承候へハ、御普請二ハ御かまひ無御座由候間、御音信物も御状もひかへ申候て、私事も于今民部殿へ參不申候、御上下二御音信被遣候間、今度者人申間敷候と奉存候、但さやう二候共、可被遣候哉、被得 御意、可被仰遣候、

一、久永源兵衛殿へハ、御判帛御座候を、御状相した、め、石之わたり不申候以前二參候て、可然候由被仰候間、御小

袖五つと御状ニさしそへ、今日可參と奉存候、いづれも金銀ハ必々不入御事之由にて候、金右衛門殿御一人二候ハ、いかやうにも御馳走御申被成度と、内々思召候へ共、わきくへ是非之儀無御座候得者、御壱人にてハなされにくきと見え申候、其上石御渡し被成候衆、何かと候へハ石なともしかと不申、又わたりかね候と見え申候、就其大納言様たちさへきをとらせられ候と見え申候、金銀之入申方もあまたのきを取申候事ニ、手間入さう二御座候、然者大炊殿などさへ御普請奉行衆御ふる舞色々御馳走之鉢之由、及承候、其外之衆ハ是にて御推量可被成置候、

一、嶋田彈正殿へ二三度參候へ共、不懸御目候間、又一昨廿七日朝ニ參候へハ、やうくあはせられ候鉢ニ御座候、御普請ニ付、用所候ハ、申候へとハ被仰候へ共、あはせられ候事無御座候間、談合仕候事も不罷成候、御人足無殘廿四日ニ參着仕候由申候へハ、私を昨廿八日か来朔日二両上様御目見仕候へと被仰候、昨日廿八日二ハ、將軍様少御虫氣ニ御座候間、諸大名衆御札相止申候故、私儀も不罷出候、来朔日御札御座候ハ、其時罷出候へと被仰候、
一、細川越中殿へ白鳥式つ・さけの筋子百筋持參仕候、御返事參候間、上申候、私參候日者、連歌御座候由候間、不懸御目罷歸候、其晚御使被下候つる、
一、御普請方々小口を一度二被 仰付候ハ、内への出入と

まり可申候間、廿日卅日ほとつ、ハ、たんくに次第可有御座候かと申唱御座候、就其御人足參候通を、則嶋田彈正殿まで申渡候へ共、尚又さやうのためと存、大炊殿へも今日申候ハんと奉存候、上杉彈正殿・政宗之御人足ハ于今一人も參不申候由候間、自然右之通二次く罷成候共、先御人足はやく參次第二、石をも御渡し可被成かと奉存候、哀さやう二罷成、早々隙明申、罷下度候、又申唱之分者、伊豆石出かね申候間、一度二皆々へ御渡し候石無御座候間、一小口つ、石之參次第二御座候など、も申めくり候、かねて御つもりよりおほく石入申候と見え申候而、ふる石之分者はや無御座候由申候、伊豆石參候石を御まち候て、御渡候由、金右衛門殿ニも御物語候、此中者天氣惡候間、日和しかと不申候而、遅々申と見え申候、右之通可有御披露候、恐々謹言、

二月廿九日(寛永六年)

梅津半右衛門

憲(花押)

小場源左衛門殿

小場五 梅津憲忠書状 (AS312-1-5 / 『家蔵』五)

(端裏朱書)【義】

返々、ありま玄番殿内衆之たかノ鈴・同す、いたさし上可申由被仰遣候間、上申候、はやふさハとやをかひ申候

へと申付候、彼鷹御はこ参候、日ハ五月七日ニ而御座候、
とひ根村之百姓大白鴨を取候を見合候而、取申候由、其
もの申分ハ、六日ニ取申之由候、し、さんくをち申候
而、参申候、以上

一書奉啓上候、銀子御用之由、被 仰遣候間、今日七日、
百五拾貫目指上申候、

一、飯塚伝右衛門・小田部金藏、又爰許方罷上候飛脚、右三
人当三日二下着仕、御書共致頂戴候、

一、下賀茂ニ 御座成候由、地形一段之所ニ而御座候而、日
野ニ御座被成候たるよりハ御慰も可有御座と奉存候、

一、御広間ニか、り申候御鑑之事、畏奉存候、もとのことく
柄口を朱ニぬり直し可申候、御鑑をもとかせ申候而、さし
置可申候、

一、御兵具共ハ、去月ノ始方申付候て、さひをもとらせ申候
ハ、てつほう共も善兵衛・金丞罷出、日々ぬくい候て、あ
ふらをさし置申候、奉行を差添、念を入申付候、

一、当年者菓子以上三果参候、このり式つ御座候か、則をち
申候而、一つも無之候、御はいたかも四つ無病ニ而御座候
を、丹後・平野貞氏・平野貞氏・兵左衛門・茂左衛門ニ預ケ、すへたて
申候、今一つはいたか御座候へ共、又毛を仕候而、さし置
申候、

一、御台所はやほこし候て、近日立可申分ニ仕候、地形之儀

ハ如御書付之繩はり可仕候、東之方つまり申候間、御鷹屋
之間漸々七尺計も可有御座かと存候、罷成申ほと東へよせ
可申候、

一、八田之小川ニ而ますのうを見付候由申候間、私所へくれ
申候、物語ニハ承候得共、見申たる事ハ初にて御座候、余
おほきに候間、可懸御目ニと存、さし上申候、定御用ニ
ハたち申間敷候得共、珍物ニ御座候間、如此候、

一、小野崎讃岐相果申候、定孫三可申上候、扱又知行之儀ハ、
二番目ノ甚ハ二さぬき後ハ可被下由、さぬきニ知行被下候
時 仰出ニ而候つる、御失念ニハ御座有間敷候得共、被
仰上候て可被下候、

一、塙正吉当四日ニなら山川ノ川口ニ而、何と仕候哉、越申
候とおしななされ、死申候、子共ハ無之候、弟計御座候
由申候、御次ニ可被 仰上候、

一、銀銭之事被 仰遣候、畏奉存候、

一、去月十七日方廿八日まで日々雨ふり申候、如形之供水ニ
御座候、築地破目折角築立申候へハ、又はしり申候、

一、役内・す川ノ橋出来申候、今度之供水ニも流不申由申
候、役内川之橋をハはね橋ニ申付候、春中之水ニ而中ニ立
申候わくをしなかし申候間、中くわくたてニハ罷成まし
き由申候間、わくなしニ仕候故か、今度之大水ニもこたへ
申候、

一、御参内ハ何比ニ御座候哉、早々被明 御隙を、北国を直
二御下候様ニ申度候、大納言様御上落御遅々ニ付て、此
方へハ何角申来候間、銀子上候事遅々申候、以御氣嫌可然
様ニ被仰上、可被下候、恐々謹言、

七月七日（元和九年）

梅津半右衛門尉

憲（花押）

小場小伝次殿人々御中

小場六 梅津憲忠書状（『佐竹文書』／『家蔵』六）

以上、

去月廿三日之御飛脚、院内方町送二而一昨朔日已刻、参着、

御書三通頂戴仕候、

一、御上洛今月末ニ可有御座ニ付而、重而被召寄候御供衆、
廿日頃ニ江戸迄参着候様ニ可申付旨被仰下候、窪田ノ衆ハ
過半廿九日ニ罷立候而、院内迄追々飛脚さし越申候而、御
書通為申聞候、定而人馬もつかれ不申候様ニ可被罷上候、
一、廿三日ニ御年寄衆御振舞、御機嫌能御帰候由、御肝要ニ
奉存候、
一、大納言様へ御人分御座候由、御日出度御事候、
一、上方へ兵糧越申候儀、当年者いつかたも船一艘も不参
候、能登八郎兵衛舟、酒田ニ而米をつミ申たると申候へハ、
御用之由申付、よひよせ申て、御米つミ申候、順風無御座

候間、出し不申候、

一、御台所之御指図、大和田六右衛門^{前之}ニ被遣候、昨二日之晚
罷着候、御意之通畏承候、

一、崩目再興之事、先度御書付被遣候間、其外ハ申付間敷候、
尚又今度御人数罷上候間、人足も窪田ノ百石取より下之衆
ハかりの分ニ御座候而、それにてそろ／＼夏中可仕候、御
中城のかたの大崩めにハ手を付申間敷候、西ノ方ノ御長屋
之下などを土をとりつけさせ申候、天氣次第ニ築立可申
候、

一、御巢鷹之事、畏奉存候、御はい鷹ハかり 御城ニハつな
かせ可申候、このりハ遣候衆へ出し申候て、つかハせ可申
旨、畏奉存候、

一、主馬阿仁^{前之}方罷帰、今日罷上申候、山々様子可申上候、

一、酒田・本城いづれも沖ノ口役あかり申候由候間、湊ノ舟
ノ出入役もあけ申候、

一、太森百性御上前目安上申候、御上以後せんさく仕候へ
ハ、為指申分も無之候、肝煎ニせんさく仕候事御座候而、
肝煎めしよせ、相尋可申と百性ニ申付候へハ、とく蔵入ニ
被 仰付候へと申候条、それハさ様ニハ不成事候由申付候
へハ、其後二度と私所へ不参候、江戸へ其ま、罷上候など
見え申候、惣別秋田仙北方江戸へ御訴訟として百性共罷上
候事、兼而 御法度之儀、諸郷ノ者存之前ニ候へ共、太森

り今度罷上候事、不及是非候、急度諸郷中へ重而罷上候ハ、可為曲事を可申付候、太森より目安被遣候、私直二様子相尋、重而可申上候、此旨可預御披露候、恐々謹言、

五月三日（元和九年）

梅津半右衛門尉

憲（花押）

小場小伝次殿

小場七 梅津憲忠書状（AS312-1-3 / 『家蔵』七）

〔端裏朱書〕〔義〕

猶以、わかき大工咄人差上可申由被 仰越候間、今度為上申候、以上、

去月廿九日之 御書、当十三日御小人替之もの、よし候て持参、頂戴仕候、

一、松前方之御鷹、十三日ニ参着仕候、則桐沢久右衛門^{（近江）}ニ申付、差上申候、如被 仰遣、尾袋・羽袋新敷仕候様ニと申付候、大鷹計三つ上申之由候、委細之書付ハ久右衛門所より上申之由候、然と道中御鷹之ゑニ犬計かい申候て、罷上之儀、是又申付候、今度者爰元より犬をひかせ申候て、遣し申候、

一、御上以来爰元より罷出候はい鷹かハリ、又た、鷹にも御手遣にも不罷成、御はい鷹者私ニ被下之旨、忝奉存、随分冬持を仕候て、来年つかい可申と唯今よりなくさしニ罷成申

候、当年者爰元覺不申寒様ニ御座候、打続五六日つ、大ふきにて御座候、少々念を入不申候てハ、小鷹之冬持なりかたく存候、

一、殿様^{（近江）}御機色、殊ニ御すねの御病も御平癒、御機嫌能御座候由、御目出度奉存候、而 上様より御上使、西丸様より御鷹御拝領、又こしかいへも白鳥御上使にて御拝領、無残所御仕合承、珍重奉存候、爰元御立之刻、御行歩叶不申、にかくしき御様子ニ而御座候へ共、御上被成候、左様之思召入ニ御座候間、御仕合能御座候ハて不叶御事ニ御座候、上様御耳ニ入申儀者、無御座候共、御としより衆へ成共、御立之時分之御機色、御行歩為見不申候事、御残多御事ニ而御座候と、爰元ニ而くれく申御事ニ御座候、定而 御目見被成置、其上之御仕合之儀者、弥々如思召候て、今程者御鷹野ニ御座被成、夜々御料理御座候ハんと奉存候、

一、今月十日、ことくしきふきにて御座候、十太夫・正二郎白鳥四つ手どらひ二いたし申之よし被申候て、御台所上被申候、様子者、十太夫前之堀へふきあひ申候白鳥共おり申候而、立あかり申事不罷成おり申候、其刻右兩人通りありハせ見付候而、取申之由被申越候、直談者不承候間、こまかの仕合者不存候、重而便宜次第二上可申候、今度者御鷹師衆急申候間上不申候、御次而御披露可被成候、

一、^{字體如左}惠齋御立以来散々煩ニ御座候、今之分ニ御座候ハ、来春迄之堪忍難罷成存候、恐々謹言、

極月十五日（寛永四年）

梅津半右衛門尉

憲（花押）

小場源左衛門殿

小場八 梅津憲忠書狀（「家藏」八）

以上、

去月十三日・十九日之御日付之 御書頂戴仕候、

一、窪田・角館・横手・湯沢・太館・十二所・比山星場相

定、鉄放稽古仕候事、盆前計うち申候得と申遣候、

一、太久保加賀殿御子息新十郎殿御赦免ニ付、南部・津輕ニ

御座候右京殿・主膳殿も御上候事可有御座候間、爰元御通

二候ハ、御馳走可申旨、畏奉存候、

一、盆中町中へ御奉公人・同下々見物なとニ参候事、停止可

仕旨、畏奉存候、町々せかれ共ハ其町くニ而おとりなと

ハ不苦候由、畏奉存候、

一、らつこの皮之事、便宜御座候間、松前へ申遣候、

一、江戸御供三番ノ組書立、并三番ノ組之外書立、上申候、

可被入御披見ニ候、

一、来年御上洛之御用ニ、御かち走り百式十人、在郷御奉公

人二番め三番め之御扶持方取候内、若器量之能御座候を可

申付旨、畏奉存候、方々へ細二人を遣し申候、

一、御足輕之事も申付候、

一、江戸御供三番ノ組之外、御上洛之御供ニ不罷上衆、償出

し申候様ニと申遣候、

一、御上洛之御供衆、馬心懸、念入可申旨申付候、

一、天徳寺御屋敷、泉村於伊勢之御立候山方西ノ方一本杉之

御座候地形一段能御座候、近日地形引人足申付候、御家も

材木申付候、

一、御書院之柱切よせ申候、如御書付之、さびを付候へと申

付候、

一、爰元馬町二馬百余参候得共、よき馬ハ不罷出候、御馬

式正取申候、

一、はやふさノ菓子、小鹿方弟兄参候間、私之庭ニはなし候

て、置申候へハ、にけ申候而、不参候間、漸々とらい申候

而、御鷹屋へ相渡申候、今日までハ無事ニ御座候、

一、^{毛利}毛利殿方御使于今不参候、当年ハ材木買不参候由申候、

一、近年無御座日てりにて御座候、去月あつく御座候、此

分ニ来月中も候へかしと百性共ねかひ申候、

一、由利修理殿御地行檢地申付候、今月朔日方御縄打仕候者

共さし越申候、佐藤源右衛門^{元吉}為御檢使申付候、二三郷もう

ち申候者、申越候得と申渡候、于今不参候、様子重而可申

上候、恐々謹言、

梅津半右衛門

六月八日(寛永二年)

花押同前

小場源左衛門殿まいる

※天徳寺屋敷のこと(政景日記寛永二年三月二十一日・五月十九日条)。

小場九 梅津憲忠書状 (AS32-14 / 『家蔵』九)

〔端裏朱書〕〔義〕

以上、

今月十日・拾六日(音傳二五号)兩日之御日付之 御書頂戴仕候、

一、金銀指上可申之由被仰遣候、御膳番衆へ談合申候而、御藏方式百貫目、又方々参候を八拾貫目、判金七拾枚、小判九百両取集、指上申候、

一、八月替被申御供衆之御書立被遣候、催促仕候、其内太窪五郎八・向庄兵衛ハ八月前ニ取直可申様ニ無御座、相煩申候、白土孫七・石井弥七、是も同前之由申候、道策へ佗言申候、薬をもたべ申候而、取直申候者可罷上由申候、先為御心得之申上候、

一、長十郎事ハ、氣合ハ取直申候得共、かミぬけ申候而、于今もとゆいニもかかり不申鉢ニ御座候間、罷上候ても御供以下罷成間敷候、

一、中川庄七、宮内代ニ罷上候へと、被 仰遣候、宮内氣合

取直候て、罷下候間、罷上候而、御奉公仕度由申候、見申分も本覆と見え申候、左様ニ候共、庄七を可被為召登候哉、是又可被得御意候、

一、九月之御ふく、爰元方人を遣可申之由、畏存候、御めしれう之御小袖、びろうたう色式(金糸)つ分、是も大森所へ可申遣候、

一、松前へ之御鷹師衆之事、畏存候、御音信物も相調、如每年之差越可申候、

一、野代・舟越へ之金銀相場、兼而申付候も、此度被 仰遣候も、少之替ニ御座候、当年ハ材木買手すくなく御座候間、先其分ニ而指置申候、材木之直ニさし引ハ御座候間、違不申様ニ可仕候、

一、天徳寺御屋敷之普請稼申候、客殿大くり・小くり、はや材木相調、大工被指置申候、当年中ニ出来申候様ニ可仕候、此旨可被 仰上候、恐々謹言、

六月廿七日(寛永二年)

梅津半右衛門

憲(花押)

小場源左衛門 人々御中

追而、佐藤源右衛門修理殿御知行御検地ニ付而罷在候、八月前ハ隙明間敷候、何之替衆方も遅可有之候間、其御心得可被成候、一郷宛うち申候一昏さし上申候、可被入御披見候、以上、

小場一〇 梅津憲忠書状 (AS312-1-6 / 『家蔵』 一〇)

(端裏朱書) 【義】

猶以、其元方參候御飛脚ハ草臥申候間、一兩日休息なさせ申候而、のほせ可申候、先御供衆之様子可申上と存、如此ニ御座候、若相替儀御座候者、可被仰下候、

一、あけの古川鳥場数すくなく御座候間、猶可申付由、畏奉存候、川ノ目ノ古川ニも如御書付之可申付候、

一、御門場ニ而手判細之者よこて申付候、今日罷立候へと申付候間、其分ニ可有御座候、以上、

当八日未刻之御書、一昨十三子ノ刻御飛脚參着、頂戴仕候、

一、公方様御上洛御義定ニ付而、二組之御供衆為上可申旨、畏奉存候、昨朝在郷まで無残飛脚をさし越申候、窪田中之衆ハ当廿日ニ爰許罷出候へと申触候、五月中旬ニ御上洛ニ候ハ、路次中之乗馬共つかれ不申様ニ、爰元をちとはやく罷出、来月五日六日比江戸まで罷着候様ニと申触候、如御意之、式部太輔ニハ廿二日ニ太館を罷出候様ニ申遣候、定而油断被仕間敷候、

一、騎馬之衆御覺之ことく、御供衆と今度之二組と合而百拾七騎ニ而御座候、御足輕ハ今度在郷之鉄放之者式百九拾人、此外御のほり五拾人申付、のほせ申候、彈右衛門指南之御小人ハ無用之由被 仰遣候間、のほせ不申候、御鐘之衆ハ主計殿方之出鐘之歩者百五拾人罷上候間、くほた之御

やり之衆ハ為上不申候、爰許御立之時分、御陣之御用ニ無之、御上洛までノ御事ニ候ハ、御足輕數右之通ニ申上候と覺申候間、如此ニ候、若此外ニも御用ニ御座候者、可被仰下候、

一、三月廿八日之御日付にて、檜山方之飛脚ニ、御書当八日頂戴仕候、

一、御茶壺去月廿日ニ相立可申由被 仰置候間、飯塚伝右衛門・小田部金藏兩人御茶つほ五つ宗喜所^(天徳)へ持參仕候得と申付、のほせ申候、

一、六郷御休所之御普請申付候、横沢御休所ふきかへ可申由、畏奉存候、

一、去年被 仰付候川舟材木老艘分罷出候由、野城方申越候間、近日作り申候、奉行さし越申候、猶いつれも罷上候時分可申上候、恐々謹言、

梅津半右衛門

卯月十五日 (元和九年)

憲 (花押)

小場小伝次殿 人々御中

小場一一 梅津憲忠書状 (AS312-1-9 / 『家蔵』 一一)

(端裏朱書) 【義】

以上、

廿一日之御日付之御書、昨廿七日巳刻、院内方町送ニ而參

着、頂戴仕候、

一、御上洛五月中旬ニ御座候由、就其御人数御目錄重而被遣候、御供仕被罷上候衆と、先日御催促之衆と、又今度被仰遣候衆、合式百騎ノ都合催促仕候、御足輕其外之儀も、如御書付申付候、来月十四五日間ニハ多分可罷着候、比内筋^筋罷立候衆ハちとおそく可有御座候、

一、越前之儀、于今相済不申候由、御上洛ニ御落居ニ御座候を御聞候ハ、定相済可申候、

一、今度罷上候衆ハ、如被仰遣候、御供衆三番ノ組之内、高を取申候衆無残罷上候、其外之儀ハ、在郷衆さいそく仕、のほせ申候、御陣ニ御落居ニ而、御人数尚罷上候ハ、窪田之衆無残為上可申候、

一、夫丸之儀、三百五十人申付候、大かた是ニ而可有御座と奉存候、猶又御用ニ御座候ハ、追々為上可申候、

一、主計殿^{西兵衛}へも御上候へと昨朝申越候、先達御催促之甘騎と百五十人之鎧之衆をハ、爰元^元罷上候衆同前ニ先へ為御上候様ニと申越候、主計殿ニハ御支度被成、一兩日も跡ハ上候へと申越候、小伝次^方ノ書状も相届申候、

一、主馬ハ阿仁之山散々ニ罷成之由申候間、見せニさし越申候、昨日申越候而、朔日ニハ可罷帰候、爰元^元罷上候衆ハハ一日もおそく可有御座候、其御心へ候て可被仰上候、一、山方内匠^{内匠}機合も能御座候間、今度可罷上と申候へ共、よ

きも悪も不知煩にて候間、無用と申候、もし重而御人数御さいそくにて候ハ、為上可申候哉、被得 御意候て可承候、

一、十三日之御日付ニ而浅野兵左衛門・あつき左介罷下ニ、御書当廿一日ニ持参、頂戴仕候、ちいさ刀之儀、畏奉存候、小野崎吉内ニ相渡申候、

一、銀子有次第ニ為上可申旨、院内へ人を遣申候、参次第ニ上可申候、当年ハ山しかと無之候て、御米鉛払銀一円すくなく御座候間、有之ましきと奉存候、三月ノ分ハ先立百五十貫目差上候時為上申候、今月分ハふかしき事ハ有之間敷候、又今度罷上候衆路錢引申候ハ、残ハ有之ましく候と存候、右之通御披露所仰候、恐々謹言、

卯月廿八日(元和九年)

梅津半右衛門尉
憲(花押)

小場小伝次殿

小場一二 梅津憲忠書状 (AS312-110 / 『家蔵』 111)

(端裏朱書) 【義】

追而申上候、敦賀へ之御米舟、越前之儀承届不申以前ハわかさへ舟をつけ申候やうにと、昨日之書状ニ申上候へ共、只今申刻、越前之三国之藤蔵と申船頭参着申候、彼者申候分ハ、何とやらん若狹之儀をハ申唱候由申候、其元ニ而ハ御沙汰も

無御座候哉、御米舟をハ能登・加賀辺相着、越前之儀承届次第二敦賀へハ参候へと可申付候、右之藤蔵ハ越前之もの二御座候、宰相殿豊後へ御下御落居候て、荷物又御供衆ノ女房子共以下、無残京都迄参候を見申候て罷下たる由申候、越前むつかしく候ハ、下申儀有之ましく候へ共、御閑居二相済、心安罷下たと申候由候、長三郎など罷上候事、路次ハかり見申候て、可罷帰候哉と奉存候、但さやうにも仕、御静謐念願二御座候、恐々謹言、

五月七日（元和九年）

梅津半右衛門

憲（花押）

小場小伝次殿

小場一三 梅津憲忠書状（AS312-1-2 / 【家蔵】一三）

（端裏朱書）【義】

以上、

当朔日之御日付之 御書、糟谷与次右衛門持参、一昨十三

頂戴仕候、

一、こひんのうすくひたい取申候事、御法度之旨、先日被

仰遣候間、窪田中者不及申、在郷迄、中間・小者等をもさ

かやきすりなをし候へと申触候、

一、在郷之御奉公人之二番め三番め、鉄鉋うち申者之事、跡々御扶持取候もの共ハ、さいそく不申候、今方御扶持被下候

様二と申者共ハ、右之通二申付候、比山・角館両所二五六人御座候、其外ハ于今御扶持之沙汰不申候、若跡々方御扶持取候二番め三番めのもの共二も可被 仰付候哉、重而得御意、可被仰遣候、

一、来年御上洛御儀定之由、就之御鉄鉋衆之内四百人、わかくせいのおほきなるをぬき候て、差置可申旨、畏奉存候、細候て差置可申候、

一、諸給人、年寄か若輩かにて江戸御供不仕候御奉公人細可申旨、畏奉存候、

一、日本国諸大名衆無残御詰候而、人多二御座候二付而、九郎左衛門・清十郎兩人、別而悦申候由、推量仕候、

一、当年爰元以外之日てり二御座候、色々雨のいのり仕候へ

共、降不申候、今晚少ふり申候、用立申ほとにハ無御座候、不可然事二御座候と申御事二候、

一、江戸御供衆七ヶ月替二被 仰付候由、御尤二奉存候、其分用意仕候得と申触候、巷月も延候間、爰元之衆ハ悦申たる跡二御座候、恐々謹言、

五月十五日（寛永二年）

梅津半右衛門

憲（花押）

小場源左衛門殿

小場一四 梅津憲忠書状 (ASJ2-1-7 / 『家藏』一四)

(端裏朱書) [義]

以上、

当拾日之申刻之御書、十六亥ノ刻頂戴仕候、御上洛之儀仰出御座候ニ付而、御供衆五月五日比ニハ罷着候様ニ被仰下候間、則申触候得者、又十一日申ノ刻之御日付之御書、一昨十七巳ノ刻頂戴仕候、御供衆之人数大炊殿へ尋御申被成、重而御書付別番ニ被仰下候、如其催促仕候、来月十五日以前江戸迄罷着候様ニ申触候、

一、為御扶持方、大津迄八木のほせ可申旨、畏奉存候、此中も内々其心掛申候得共、当年ハ未舟壹艘も上下不仕候、米奉行に申付置候間、舟調次第為上可申候、

一、六日之御日付ニ而御書、仙北中あみにて鴉取不申候様ニ可申付旨、畏奉存候、近年堅御法度にて候間、取不申候得共、猶又可申付候、銀山十分一へも可申付候、

一、脇もとニ御かり屋之事、畏奉存候、地形ハの竹御座候屋敷之内見計為作可申候、

一、熊ノ皮御用之由、当年ハ此方ニも一切無之候と見え申候、売物ニも無御座候得共、相尋、御座候ハ、近日為上可申候、

一、正洞院郷湖式百人余御座候、殊外にきハしく御座候間、正洞院も無事之由被仰候、此旨可預御披露ニ候、恐々謹言、

卯月十九日 (元和九年)

梅津半右衛門尉

憲 (花押)

小場小伝次殿 御中

小場一五 梅津憲忠書状 (ASJ2-1-1 / 『家藏』一五)

(端裏朱書) [義]

尚以、銀子道中無相違参着申候由、御肝要ニ奉存候、以上、

七月十七日之御日付之御書、同廿八日御飛脚参着、頂戴仕候、

一、秋田仙北中島屋共相細申候、鷹待之事、御奉公人ニも待申候やうに申触候、在郷給人衆之内ニも待申候様ニ令申遣候、

一、初草出来候共、江戸へ為上申候事、無御到来以前ハ可奉待之由、畏奉存候、

一、役内川・須川ノ両橋出来申候事、先達申上候、然ハ横堀之町かぎの手ニなをし申候へと被仰遣候、畏奉存候、

一、横手じやの崎二橋をかけさせられへく候間、道具為取可申旨、畏奉存候、

一、服忌ノ書付、僧正ハ被進候由候て被遣候、拝見申候、

一、去月廿七日之御飛脚、当八日ニ参着申候、御書兩通頂戴仕候、政宗様御袋御遠行ニ付、仙台へ御使二岡本藏人致

催促、九日ニ爰元相立、越申候、如被仰遣候、京方ノ御使
之由被申候へと申渡候、御香代銀子三十枚差越申候、御口
上之様子をも如御意申渡候、罷帰候ハ、重而便宜次第二
可申上候、此旨可預御披露候、恐々謹言、

八月十三日（元和九年）

梅津半右衛門尉

憲（花押）

小場小伝次殿

※政宗母保春院元和九年七月十七日没。

小場一六 梅津憲忠書状 (AS312-114) / 【家蔵】一六)

（端裏朱書）【義】

猶々、主馬事、院内之銀山へ先日参候由申上候ことく、
参候へ共、水ぬきのふしん出来申さず候間、先罷帰候へ
ハ、又今般はやよき時分之由申候とて、一昨七日院内銀
山へ罷越候、此水ぬきノ普請成就申候間、来年ハ山もさ
かり申へき由申候、

一、松前方ハいまた御鷹参不申候、何とてをそく御座候哉と
存候、参候ハ、追而可申上候、以上、

一、源六郎殿御下衆今まで奉公申候者共、ふちかた切符当年
中ハあとのことく申付候へと関数馬ニ申付候、残米等は集
候様ニ堅申付候、又御北ノ御知行分、年々ノ算用矢野長左
衛門仕候、給人知行捨、残而蔵入分七百四十石御座候由申

候、是又御申候へく候、以上、

追而致啓上候、殿様遂日御機色御本複被成置、其上両御
所様方節々御上使、西丸様方御鷹御拜領、御仕合如思召之
由、珍重ニ奉存候、将又道中御腹中つまへ申候儀、常敷方少
つよく御座候様ニ承候得者、今度寺崎助丞罷帰、各々物語之
様子承、驚入申候、遠路故不存候而、た、いまのとくになり
申候、貴様など御機遣察入申候、早々御快氣御目出度奉存
候、御すねの御痛も御仕合二而ハ御平癒可成と奉存候、恐々
謹言、

極月九日（寛永四年）

梅半右

憲（花押）

小源左衛門殿 人々御中

※『梅津政景日記』寛永四年十二月七日条。

小場十七 梅津憲忠書状 (AS312-112) / 【家蔵】一七)

（端朱書）【義】

以上、

去十五日之御日付にて、かや橋方被下候 御書、昨廿七日夜
二入頂戴仕候、仍 八幡之御立候くるわに兵糧蔵立可申候
旨、畏奉存候、如 御書付、縄張仕立可申候、材木之儀今日
方申付、しらへ申候て、不足之分ハ為取可申候、材木ハ可有
御座候へ共、ふきかや御座有ましきと存候、それもかや奉行

二相尋申候て、在々をもたつね、集可申候、將亦為御上被成候御鷹共、さがり申たる鳥餌をかい申故、あハひ悪罷成、死申候ニ付、重而^カハいぬをひかせ申候様ニ、桐沢久右衛門ニ可申付旨、畏奉存候、今朝よひよせ申候て、堅可申渡候、恐々謹言、

梅津半右衛門

霜月廿八日（寛永六年カ）

憲（花押）

小場源左衛門尉殿

小場一八 梅津憲忠書状（AS312-1-13 / 【家蔵】一八）

（端朱書）【義】

返々、我等儀も京都無事ニ罷立候、先以可御心安候、江戸二とふ人御座候間、大かたとめられ候はんかと存候、以上、

塩鯉持参候者無御用候間、返し被遣候、

一、先達御飛脚ニ申候、相国様当六日ニ御立被成候、殿様

今日九日京都を御立ニて候、江戸御立則御暇出申候へかしの存候、

一、何時之書中ニも御鷹之事御書ニて候、其沙汰無之候由、

御意候、

一、御下中何も今日迄ハ無事ニ候、金大夫殿・孫左無何事御供候て、京都被罷立候、乍去兩人衆京都ニ執心候哉、くた

りかね被申候、可有御推量候、恐々謹言、

梅半右

十月九日（寛永三年）

憲（花押）

小源左様

貴報

小場一九 梅津憲忠書状（AS312-1-11 / 【家蔵】一九）

（端朱書）【義】

以上、

^{（本多正和）}本上州御下岡村左大夫女房、本城之留守居衆氣遣候て、あつかり置候事、罷成ましく候由、返答無余儀存候、其通得御意候へハ、さ候ハ、横手之町ノ宿ニあつけ候て、先差置候へと御意ニ候、其内左大夫所^カ申来候か、又其身下候か、可有之候間、先其分ニ置候へとの御事にて候間、八兵へ所へも申遣候、爰元廿二日ニ御立被成候、昨十八日ニ西丸様^{（正徳）}井上主計殿御上使ニ而、御帷子三十・銀子五百枚御拝領ニ而候、修理様ニも御帷子三十御拝領、御仕合無残所候、可御心安候、聞敷候而、書状不能巨細候、恐々謹言、

梅半右

五月十九日（寛永三年）

憲（花押）

小源左様貴報

※『梅津政景日記』寛永三年五月十九日条。

小場二〇 梅津憲忠書狀 (AS312-1-15) / 『家藏』二〇

(端朱書)「義」

一書令啓上候、御用之儀者 御直書ニ可有御座候間、不及申候、

一、当六日 行幸、中日三日御逗留、十日ニ還幸ニ而御座候、公家・武家立合之御拵おひた、しき事、書中ニ不被申候、

一、兩 殿様供奉之被成、其外辻固御役所等無事ニ相濟、満足不過之候、可為御同意候、乍去我等事者、去月廿五日但馬御出湯之日より十日之日までハ一夜も寝不申候間、悉草臥申候、可有御推量候、

一、大御台様御煩つよく御座候由、從江戸御注進之由候、就其兩 上様還御近々ノ様ニ昨晚申來候、実説ハ未承届候へとも、先御下向早候ハんと存候間、やかて罷下、御物語可申候、

一、大殿様御気色能御座候間、可御心安候、恐惶謹言、

九月十二日 (寛永三年)

憲 (花押)

小源左様 人々御中

梅半右

小場二一 梅津廉忠書狀 (『佐竹文書』) / 『家藏』二四

尚々、右之様子共追而委得御意度候、以上、

已刻之御飛札酉刻参着、御狀拝見仕候、十一日ニ本城之城

無相違御請取之由、先々御目出度存候、

一、其元御縄打之御用ニ、縄打たんれん之衆貳拾五人御用之由、爰元ニハ耆人も居不被申候、方々へ御檢見ニ被參候間、若御公儀御用ニ候間、爰元檢見を止申候而も、其衆をよひよせ申越可申候哉、猶御飛脚可給候、たとへ其元へ縄打衆越申候共、方々に罷在候間、近日之御用ニハ罷成間敷と存候、其上在郷衆之内ニも檢地たんれんの衆其元へ參候由、及承申候、

一、御檢使衆へ之御音信之米大豆之事、半右衛門ハ一円其沙汰不申置候、相馬大膳殿へハ米百石・大豆五十石參候由にて、上乘ニ杉山五郎右衛門、是ハ半右衛門申付指置候、爰元天氣惡候而、舟出し申事不罷成候而、于今遅々申候、明日ニも天氣次第舟越可申候、

一、御ふちかたニ引申候大豆之事、先立越申候ハ、舟破候而、用立不申候由、忠左衛門・文治申遣し候間、一昨十日ニ申付、大豆七拾石ほと舟ニ為積、指置候へ共、是も天氣惡候間、舟出し候事不罷成、今日ニ成とも日寄次第ニ越可申候、此七拾石之大豆さへ御藏ニハた、三十石御座候而、四拾石ハかり候而、越申事候、御檢使衆御所へ被遣候大豆ハ、半右衛門も不申置候、其上此外少も大豆無之由候、但半右衛門貴様へいか、申候哉、是又不審ニ存候、猶追而委得御意度候、恐惶謹言、

梅津長三郎

九月十二日（元和八年）

廉（花押影）

小場小伝次様

貴報

小場二二 梅津政景書状（佐竹文書）／「家蔵」二二五

以上、

昨巳之刻之貴札、同戌之刻参着、拝見仕候、追而之御状子之刻参着申候、屋形様其元方御すくに江戸へ御上被成置之由、乍恐御大儀至極ニ奉存候、就之其元方御返し被遣候御道具、六匁玉のみしかき御もちつ、迄、小川刑部右衛門二渡、差上申候、御供衆明十五爰元を相立、十六日二ハ院内迄参着仕候様ニ可申付由、被仰下候、則夜中催促仕候、いづれも畏奉存候由申候、御台所詰夫爰元ニ罷在分、無殘鈴木佐内・福田平右衛門ニ相渡、為上可申由、治部左衛門・惣左衛門ニ申理り候、右両人ハ今日昼立ニ可罷出由申候、小介川正左衛門・赤津一郎兵へ二ハ、一日さかりに参候へと申付候、是も如被仰遣候、明日相立申候、

一、爰元御普請奉行衆念を入被申付候、拙者も節々罷出申候、先達如被仰下候、窪田御足輕今日御普請申付候、在所者御本丸御うら御門の坂口御繩はり被成置候、土手八幡くるハへ出候御門場、てかたへ出候虎口まで申付候、

在郷方の御足輕ニハ手形御本丸東之方之土手を明日方可申付候と奉存候、御普請取付を見申候て、こミ申候所を一組も二組もぬき申候而、戸村八郎面之御ほりへかけ可申候、如被仰下、路次少せハく罷成候共、外きでなるほときうにきらせ可申候、土橋も右清兵衛ニ如被仰付候、さげさせ可申候、信太内蔵助わきのこ口・太平道のこ口・てかた村へ罷出候こ口、いづれも可申付候、御普請奉行衆清兵衛ニ談合仕候、御足輕御普請日数廿日仕候ハ、あげ可申候、一、小場式部殿爰元へ早々御上被成候様ニ、貴様御状此者ニ被遣可被下候、右之通可然様ニ被仰上可被下候、恐惶謹言、

梅津主馬

八月十四日（寛永八年）

政（花押）

小場源左衛門様

貴報 人々御中

※「梅津政景日記」寛永八年八月十三日・十四日条

小場二二 信太兵部少輔書状（「家蔵」二二）

尚々、たつの口敷石ハ青石にて御座候、是を請取可申候、態脚力を以申上候、

一、神田土橋之御普請付而、先立両度飛脚指上申候、何時分参着申候哉、

一、去四日之晩、大炊殿へ大野市左衛門を以申上候分ハ、此

間御橋たつ之口之水少引申候間、參候而見候へハ、水もり申候所見付申候、辰ノ口之水わきへもり申候と申上候、大炊殿方御意ニハ、弥々御国方人足奉行よび申事無用ニ申、爰元日用人足を以仕候へと御意ニ候、

一、大炊殿へ得御意申度事不罷成候、仁兵衛煩氣にて、あたミへ湯治仕候、鈴木近江ハ御用御座候て、日光へ參申候、然間市左衛門を以得御意候、

一、大炊殿御意ニハ、爰元御普請被問召候而、御機遣ニ可被思召候、少之御事ニ御座候間、御機遣不被成様ニ私方能々申上候へと御意ニ候、跡々之御奉行衆へ申合、御普請申付候へと御意ニ御座候、

一、安部四郎五郎殿・石川三右衛門殿一段御懇比ニ被仰候、御普請取付申候者、御覽可被成之由ニ御座候、

一、御普請先立申上候時ハ、上之水深御座候間、見届不申候て、申上候、迷惑仕候、只今及見申分候者、余手間ハ入申間敷と申事ニ候、最前錢屋六右衛門又左衛門ニ跡仕候、御普請ニ候間、兩人談合申候へと申付候處、六右衛門過つる廿七日夜火を出し申候而、在寺仕候、乍去あたりをやき不申、自分計やけ申候間、一昨五日ニ罷出候間、則申付候、一、早々御普請可申付と存候へ共、長雨天氣あかり不申、然間辰之口水深御座候間、盆前ニハ取付申間敷候、盆後ニハ十七八日方可申付候、其上大炊殿御意ニハ、天氣あかり、

たつの口水引申候時分申付候へと御意ニ御座候、乍去先々道具以下用意申候へと御意ニ候、

一、たつの口之敷石取かへ不申候者、以来ももり可申と又左衛門申候、就之四郎五郎殿・三右衛門殿御談合可申と奉存、両三度參候へ共、不懸御目、昨日四郎五郎殿へ懸御目、様子申候へ者、尤石も奉行衆へ申上候へハ御座候、乍去大炊殿へ御奉行を被仰付、被下候へと申上候ハ、はその御奉行申人御座候間、可被仰付候、若又我等を被仰付候共、如在申間敷候、不罷成候共、私念のためニ候間、申上可然之由被仰候、今晚か明日參候而、市左衛門頼申、大炊殿へ此之由可申上と奉存候、

一、先立も申上候、奉行ニ可申付者、忝人も無御座候、迷惑仕候、年寄申候とも、私罷出、可申付候、

一、大炊殿にて御祝言之事、当年ハ相延申候と承候、越後守様にてハ当月廿三日五日間御祝言之由申候、実事ハ不存候、

一、先之御台様方之御飛脚ニ、村尾内記殿へ御狀則相届申候、

一、細川越中殿方角館之御仕合ニ付而、御狀被遣候、遠路故御無沙汰被成候由、私へ御使被下候、便次第ニ此御狀届申、能々申上候へと御意ニ御座候、又加々爪民部殿方之御狀被遣候間、指上申候、道^{四才}琢法印方御所へ御書中進上申候、

一、かや橋と黒子と兵へ書中先立之飛脚共ニ失念申候、平野主税所へ御届可被下候、

一、嶋田彈正殿此中下御屋敷へ引籠御座候而、御養性候而、誰人參候而御対談なく候由承候間、終ニ不參候、御普請之事、大炊殿と御催促之様子書中にて申候へ共、御返事無御座候、上屋敷へ一兩日以前御帰御座候、昨朝參、御普請之様子をも申上候、兎角大炊殿御意次第申付候へと被仰事候、尤御目ニハ不懸候、扱又御不審之儀、替御事も御座候ハ、追々可申上候、恐惶謹言、

信太兵部少

七月七日（寛永六年力）

定（花押影）

小場源左衛門様

梅津主馬様

人々御中

小場二四 信太兵部少輔書状（「家藏」二二）

返々、森川金石衛門殿と御状被遣候、指上申候、万々今朝申上候間、早々替御事候者、追々可申上候、又申上候御年寄衆と之御状、石川三右衛門殿と私へ被遣候、

御年寄衆と之御状、只今被下候間、早々指上申候、御用者不存候、殊廿八日之已ノ刻之御飛脚兩人、若殿様へ之御状持參申候、則指上申候、私へ之御状も參着申候、將又 御所様為

御祈念、大名衆僧正様南光坊天庵へ頼御申、色々の御祈禱被成、御札上り申候由、若殿様と被仰付候間、明日四日僧正様へ私可參と奉存候、上杉彈正殿と御祈念之御初尾銀子三拾枚被遣候由、其通ニ私も持參可申候と奉存候、此由被仰上、可被下候、恐惶謹言、

信太兵部少

八月三日戌ノ刻（寛永八年）

花押同前

小場源左衛門様

梅津主馬様

人々御中

小場二五 信太兵部少輔書状（「家藏」二三）

茂木伊折兩 御城へ之御進上物納申、御隙明申候間、罷下候、去二日之夜大炊殿と仁兵衛御使者にて、御西丸之御内書・御自分之御返事被遣候、御口上ニ、私へ御意ニハ、于今 御機嫌極と不申候而、何御見廻無之候間、伊折を 御前へ不被召出候、扱又御使者御進上物之通御披露被成候間、能々私と申上候へと被仰下候、又今度就 御機嫌ニ、何大名衆半途迄御登之様子、于今御披露不申候、正宗・上杉殿定昌、又紀伊國・尾張大納言様、小田原迄御下、是も御披露無御座由、御次而を以御披露可被成之由、如此之儀をも能々申上候へと之御口上被仰下候、將又先書ニ申上候、伊折 御本丸之仕合殘所無

御座、御進上物雅樂殿御披露にて納申、御前へ被召出、御直二御返事、其上御服・御道服など拝領申候、左候へハ、伊折早々返し可申と存、石川太郎兵へかたへ御返事相調被申候様二と私方書中越申候得者、御内書可罷出由雅樂殿御意二御座候間、齒々相待申候様二と被申候間、待申候処、火事出来、其以後雅樂殿 御登城不被成、遅々申候、漸昨日四日御本丸御内書・御自分之御返事被遣候、若殿様方早々罷下候へと被 仰付候而、伊折罷下候、爰元之御様子可申上候、殊仁兵へ申上候者、御使者を早々為御登、御本腹之御祝儀、何御同前二被仰上候様二と申候、若御祝儀上り申儀遅々申候者、爰元逗留申候様二被仰付、御使者慥之仁可然之由申事二候、但大炊殿御内儀二も御座候哉、自分之様二私へ申候、此由御次而を以被仰上可被下候、委伊折可申上候、恐惶謹言、

十月五日（寛永八年）

花押同前

小場源左衛門様

※酒井忠世邸火事九月二十五日〔梅津政景日記〕寛永八年十月五日条。茂木伊織江戸より秋田帰着十月十四日（政景日記同日条）。

小場二六 岡忠政・菅谷元成運署書状（AS312-36）「御文書」卷三）

（包紙上書）「二七ノ義」岡三郎兵衛・菅谷小隼人書帖巻通」（端裏押紙上書）「岡三郎兵衛・菅谷小隼人書帖通「二七ノ義」」

以上、

一書令啓上候、仍被仰付候御買物之目錄為御披見指上申候、

一、石垣坪定之義、兵部少談合仕候、然者乗物町又左衛門と申者直入、平石垣一坪二付而小判一両一步、見付ハ三両、すミハ四両一步と申候、錢座六右衛門直入ハ、平石垣一坪二付而丁銀五拾六匁、見付ハ百八十匁、すミハ貳百五拾貳匁と申候、乍去右何も世上やすく罷成候ハ、其なミニ仕、指上可申由申候、唯今までハ何方も坪定しれ不申候二、りやうじ二極申候而ハ、自余之引列二も可罷成由申候条、先右之通二仕、若殿様請 御意申候へ者、なミの外ハ有之間敷候間、猶秋田へ得 御意申候へと被 仰付候間申上候、扱又以来為無違返、為手付六右衛門組三人二御座候間百両、又左衛門二五拾両相渡申候、

一、御普請御奉行衆方御触御座候間、極月廿七日二罷出候、岩城様御屋敷へも御触御座候而、太平孫右衛門罷出候、諸大名御下奉行何も被罷出候、御普請御奉行衆被仰様二ハ、

御馬廻衆・関東衆ハ始之二月朔日より 西之御丸御普請ニ御座候、其外御国取衆ハ三月朔日より外かこひ、小口脇ニ御座候由被仰候而、御書付御見せ被成置候、于今御町場ハ御渡不被成候、扱又二月朔日より之御普請下奉行も、三月朔日より之御普請下奉行も相談ハ同前二仕、惣御町場之内ニこミ入可申所、入申間敷所をかねて見届申、入札などのやうに成共仕、可申上候由、諸大名御下奉行衆へ被仰渡候、為覚御普請之地形・坪数之御書付御渡被成置候、其写為御披見指上申候、菟角御町場御渡被成候尅、善惡之義不申やうニと思召、右之趣被仰渡候と見え申由、下奉行衆被申候、扱又御普請場之善惡を見申候事ハ、何之なミ次第と存申罷有候、猶追々可申上候、

一、石場之義、御普請御奉行衆へ兵部少得御意候へ者、かね／＼をの／＼被取置候由候へとも、町場ニより用立ましき由被仰候、かつ手ニより追而御渡可有之ニ御座候、

一、こや場之事ハ見立申候へと御普請御奉行衆被仰候へとも、何かたニも無御座候、若中屋敷之内ニ御人足五六百程ハ納り可申在所御座候、又此度渡り申候下御屋敷こや場ハ、沢山ニ御座候へとも、また水御座候、若御普請をも被成置候ハ、こや場かつてハ一段可然由、若殿様御意ニ御座候、為御心得申上候、

一、石請取申候時分ハ、算用仕者人可申候、石之寸尺を割坪

ニ合せ、請取申由承候、何時渡り可申もしれ不申候、是又為御心得申述候、

一、御町場ハかんだ橋口大かた渡り可申と承候、

一、坪数ハ壹万石ニ付而四拾壹坪之御割付之由申候、万々追而可申上候、恐惶謹言、

岡三郎兵衛

正月四日(寛永六年)

忠政(花押)

菅谷隼人

元成(花押)

梅津半右衛門様人々御中

小場ニ七

神尾元勝書状(AS1237-1/「御文書」巻二)

(包紙上書)「神尾内記殿ヨリ信太兵部少所へ被遣候御状式通「七ノ義」」

(端裏捻封上書)「七ノ義」神尾内記

(墨引) 信太兵部少様御再報 元勝

尚以、供之ものなと大勢めしつれ被参候使者惡敷御座候由被仰候間、貴様御越之儀ハ御尤ニ御座候へ共、右之通各被仰候間、必御無用ニ可被成候、いかにもかるき衆を御一人、拙者所まで御越被成候ハ、上様へ上り申、御進物并御年寄衆へも首尾能可仕候間、其段ハ御心安被思召、貴殿御越之儀ハ御延引可被成候、以来義宣様へも

右之通ハ可申上候間、御氣遣被成間敷候、以上、

昨日者御報令拜見候、然者大名衆方河越へ御使者被遣候儀、歴々之衆被差越候儀不入事之由、昨日御年寄衆被仰候、御使者之衆へも御年寄衆御相被成間敷候間、いかにもかるき衆を御越被成候様ニ、引々ニ可申入由、御目付衆なども被申候、為御心得如此御座候、恐惶謹言、

二月十七日（寛永八年）

元勝（花押）

※包紙には次の二八号もとにも入る。『梅津政景日記』寛永八年三月八日条。

小場二八 神尾元勝書状（AS312-37-2／『御文書』巻二）

（端裏捻封上書）「七ノ義」 神尾内記

（墨引）信太兵部少様人々御中 元勝

一筆令啓上候、然者加藤左馬殿^{（當時）}今日御着候、上方大名衆大形御下候、未御下無之衆も追々御下之由承候、義宣様御事も菟角爰元迄御越被成、御忍之鉢ニ御座被成可然候はん哉、自然相国様御煩長引申候へ者、御氣遣ニ可被思召と存候、相馬長門なども被罷上候様ニ申遣候、併拙者式加様ニ申候儀者御無用ニ可被成候、貴様為御心得之にも成候はんかと存、指出ケ間敷候へ共、如此申入候、恐惶謹言、

八月五日（寛永八年）

元勝（花押）

※『梅津政景日記』寛永八年八月十三日条に關係か。

小場二九 大野仁兵衛書状（AS312-142／『御文書』巻三）

（包紙）「七ノ義」土井大炊殿御家頼大野伊兵衛所方之書通

（端裏捻封上書）「七ノ義」 大野仁兵衛

（墨引）信田兵部様人々御中

房

尚以、貴様入御念候通り為申間候、秋田方御人足被為呼候ほと儀ニハ有間敷之候、爰元ニ而日用ニ被仰付候ハ、五日三日之内出来可申候、自然左様之者も入申候ハ、たんれんいたし候ものを才覚可仕候、以上、

昨日者貴札致拜見候、然者神田土橋之儀、被成御覽、秋田へ被仰上之由承候、余人足も過分ニ入申間敷候間、爰元ニ而日用ニ而成とも被成候而ハいか、可有御座候哉、参候而御談合可申上候へ共、咳氣仕罷有候、恐々謹言、

六月廿四日（寛永六年力）

房（花押）

小場三〇 佐竹義宣掟書（『家蔵』三）

掟

一、於京都ニ、無手判往還仕事、かたく 御法度候、手判持候もの悪事仕出ニおゐては、其者計曲事ニ可被 仰付にて候、手判不持者悪事於仕ニは、主人迄曲事ニ可被 仰付候ニ而候事、

一、道中路次うち先次第二少も間を不置、引続可乗事、付、

足輕其外道具持も同前之事、

一、町中通り候時、間ニ而雜談いたすへからさる事、

一、馬に沓うち候時は、脚引除候^{（有）}而うち、又本之前へ急可乗
着候事、

一、他所之衆と出入、かたく停止之事、

一、道中も於京都二も、見物かたく停止之事、

一、惣別下之者を高声ニよひ申聞敷事、

一、宿より出候時、宿之跡の方へ馬如書付之段々に立差置、

直ニ乗可出候、泊の町々内ニさへ候者、本陣之先ニ宿有之
ものも、本陣より跡へ馬を可遣候事、付、先町ニ宿有之も
のは、其前ニ可相待候事、

一、先々足輕共手前二宿へ不入内は、町ニ立候而居、宿へ入
候而以後宿々へ可有付事、

一、舟橋舟渡り之所ニ而、馬如書付之段々に可引越候、跡の
馬を引通し候者、可為曲事之事、

一、拾人組之内、老人科人於有之は、題目により殘九人も曲
事ニ可成候間、惡もの於有之ハ、兼而可致披露事、

一、人数おしのうちより出候而、町中ニ而わらじ・沓・食物
以下買候事、停止之事、

一、道中路次うちの間、たはこふき候事、かたく留置候、付、
酒屋へ寄合候而、酒吞候者可為曲事候事、

元和九年

五月十五日

※『秋田県史』資料近世編上所収。『家蔵』原本の第一紙端
下部に「小場勘解由」とあり。

小場三 佐竹義宣書状写 (AS310-176)

尚々、野城へ書付候板、六尺のは、無之候者、三尺の上
を何程成共木のは、有次第ニ申付、とらせ可申候、三尺
三寸おせまきハ不入候、以上、

当十二日之日付之状、一昨廿一日參着、披見候、爰許相替事
無之候、行幸可被成置御用意迄ニ而候、

將軍様去十二日ニ江戸を出御、被成御登二候、京都へ御着座
之儀者、定而八月二日三日比たるへく候、大御所様^{（有）}四五日之
内ニ大坂へ被為 成候様ニ唱ニ而候、先日申遣候初草之弟
鷹一つ出候者、五六日も相待、又出候鷹と二つ可為登候、七
日八日も待候而も、跡之鷹不出候者、先々つも北国を稼候而、
可登候、一つハ又跡方其をも北国を京都へ可為登候、鷹師を
五人申付、鹿嶋へ遣候而、はやぶさを五つ所望可致候、致所
望候者、則秋田へすへ候て、下候様ニ可申付候、一人慥成者
を遣、四人ハわろきこほしもの計あり候て、可登候、隼五
つ所望候程、忝分小判を其許方為持候而、可遣候、小足皮惡
敷候得者、足はれ候間、小足皮と山足緒を其元方為持候而、
可遣候、鹿嶋ニはやぶさ無是候者、下緒上綱をありき候て尋、

所望致候得と可申付候、爰元^右手前下二者かもハす、五つの
 準さへ所望候者、早々秋田へ下候へと可申付候、爰許御下向
 之様子知候者、早飛脚ニ而鷹師共江戸へ可呼候間、鷹師拾五
 人申付、可指置候、平野兵左衛門をも夫ニ差添、一到来次第
 二登候様ニ申付、可指置候、大形十月二日三日比ニ秋田を可
 相立候間、其分ニ致催促、可指置候、当秋其元にて出候山か
 へり弟鷹・兄鷹・はやぶさハ一つも江戸へハのほせ間敷候
 間、よくくゝゑがひ致、差置候様ニ可申付候、新鷹之時、あ
 らひゑを不飼候様ニ可申付候、唯湯ニ而少しめし候て、飼候
 様ニ可申付候、水鳥屋へゑかひ悪候者、新鷹ニ候共、入候様
 ニ可申付候、水鳥屋^右之出入、夜致間敷候、初鮭爰許へのほ
 せ候事無用ニ而候、九月之節句之時分其元を出候而、鮭之魚
 塩之致、有程調候而、可為登候、北国を直ニ爰許へ可指越候、
 あらば五六拾も可登候、方々へ人を遣調可申、当秋中ハ久保
 田之城之庭ニなり候梨、また惣之渡野の屋敷々になり候梨を
 も、能時分ニ取寄、疵ノなき計よく包候て、其元ニ可指置候、
 江戸へハ少も為登間敷候、葉の半分落候時分が取候ニ能候由
 ニ而候、謹言、

七月廿三日(寛永三年)

義宣(花押影)

小場源左衛門殿

小場三三 佐竹義宣書状写 (AS310-177-1)

尚々、下二付而、式部・左兵衛^{左兵衛}など久保田へ来候事、必々
 無用ニ而候、年頭ニ被登候様ニ可申遣候、以上、
 由利へ飛脚を遣候而、由利ニ有之鷹、はい鷹迄も無残久保田
 へ不着前ニよび候て、可指置候、大形廿七日時分者久保田ま
 て可相着候、不断居候間之いろりやぶれ候者、上おしを可為
 仕候、料理所之いろりをも可為致候、又相手之者あたり候こ
 たつ台破候者、やふれ目拵させ可申候、一円ニ破候者、新敷
 可為致候、謹言、

霜月廿日(寛永三年力)

義宣(花押影)

小場源左衛門殿

※義宣秋田着予定の日にちから、寛永三年か。

小場三三 佐竹義隆書状写 (AS310-177-2)

以上、

幸之間申入候、仍 西之丸様へ当廿一日之昼御茶被下候、忝
 仕合、満足推量尤候、相客ハ松平新太郎殿・森甲斐守殿・浅
 野但馬守殿・加藤肥後殿^{（半正）}・鍋嶋信濃殿^{（半正）}二候、此成以御機嫌可
 被申上候、芳寿院様御気色最前申上之通二候、自然夜々少つ、
 御熱氣さし候事候、是又連々御平元可被成候、委細信田兵部
 少可申遣候、恐々謹言、

正月廿二日(寛永八年)

義隆(花押影)

小場源左衛門殿

※寛永八年正月二十一日西丸昼の茶会（『東武実録』）。

小場三四 佐竹義隆書状写（AS310-177-3）

以上、

態舟遣候、駿河大納言様御行儀依無極ニ、岩月か佐倉へ越御申之由ニ候、朝倉筑後殿ハ酒井阿波殿預ニ候、鳥井土佐殿者何方へ御預候哉、今ニ不知候、右之趣可被申上候、替儀候者追々可申達候、其分相心得尤候、大納言様御無行儀、御苦勞被思食故か、御所様御氣色無極候由、何となく唱共ニ候、如其廿八日 御本丸ニ而大炊殿被仰候者、御所様御灸被遊候故、今日御目見得無之候由被仰候、御所様御氣色之善惡、惣而聞得兼候間、其元へ率爾不被申越候、岡忠右衛門所信田兵部少方へ越候状、為披見遣候、余事羽石又右衛門下之時分可申越候、恐々謹言、

三月廿九日（寛永八年）

義隆（花押）

小場源左衛門殿

※徳川忠長の行状による。

注

（１）頒布無料。ご希望の方は金子まで電子メールにてご連絡く

ださい。kaneko@hiu-tokyo.ac.jp

（２）佐々木倫朗「戦国期権力佐竹氏の研究」（思文閣出版、二〇一一年）。

（３）『国典類抄』前篇嘉部四十九所収「秋田国事要略」（秋田県立秋田図書館編『国典類抄』第十四巻、秋田県教育委員会、一九八三年）。

（４）『梅津政景日記』寛永九年三月四日条。

（５）佐藤孝之「元和九年秀忠上洛の江戸出立日をめぐって」

『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇一二年一六 十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員』研究代表者小宮木代良、二〇一三年）において、將軍徳川秀忠の上洛をめぐる諸大名の情報収集といった点から宣忠宛慈忠書状が利用されている。

（６）⑦は『御文書』巻三収録・同書巻頭目録「一、岡三郎兵衛忠政・菅谷隼人元成連署一通（正月四日贈梅津氏、本小場勘解由某所蔵）」「同上」、（付箋朱書）「宝永八年御青印扣ニ、本小場勘解由所蔵ナルヲ御取上、任筋目半右衛門ニ被返下トアリ、梅津文書ニハナシ」、⑧は『御文書』巻二収録・同書巻頭目録「一、神尾内記元勝書一通（二月十七日・八月五日共贈信太兵部某、本小場勘解由某所蔵、『本書ナシ』」、（付箋朱書）「宝永八年御青印扣、信太兵部ニ被返下トアリ、信太文書ニハナシ」、⑨は『御文書』巻三収録・同書巻頭目録「一、大野仁兵衛某（土井大炊頭利勝臣）書一通（六月廿四日贈信太兵部某、本小場勘解由某所蔵）」「本

書ナシ」、(付箋朱書)「宝永八年御青印扣、信太兵部二被返下トアリ、信太文書ニハナシ」とある。

(7) 拙著『記憶の歴史学 史料に見る戦国』(講談社、二〇一年)。

(8) 鈴木満『「秋田藩家蔵文書」考』(「秋大史学」四四、一九八八年)。

(9) 明和から寛政年間にかけても修史事業がおこなわれていたので、点検はこの機会になされたのだろう。伊藤勝美『「秋田藩家蔵文書」の成立の過程』(「秋田県公文書館研究紀要」三、一九九七年)。

(10) 秋田県公文書館編『秋田県公文書館所蔵古文書目録第7集 佐竹文庫目録』(秋田県公文書館、二〇一一年)。伊藤勝美『「秋田藩家蔵文書」の伝来の過程』(「秋田県公文書館研究紀要」二、一九九六年)。

【追記】本稿は二〇〇八～二〇一二年度科学研究費補助金・基盤研究(S)「史料デジタル収集の体系化に基づく歴史オントロジー構築の研究」(研究代表者・東京大学史料編纂所教授林譲)および二〇一二～二〇一三年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「一六～一七世紀の日本海地域における情報と大名」(研究代表者・東京大学史料編纂所教授佐藤孝之)による研究成果の一部である。なお、公文書館所蔵の小場家文書原本、および『御蔵書目録』については加藤昌宏氏の多大なるご教示に預かった。記して謝意を申し上げます。